

7月の二上山で

キノコの豊かさに驚嘆した妹

菌類研究会とやらの会員だという妹を2回、二上山に案内した。それぞれ違ったコースをたどったのだが、この山でのキノコの種の豊富さ、発生量の多さに驚嘆していた。私自身も妹に教えられて、今まで見過ごしてきたキノコに注意して歩くようになった。そして同時期に登った他の山々より二上山の方がキノコは確かに多かった。もちろんキノコが出現している期間は短く、少し時期がずれば様相は一変するのだから、ちょっと見での安易な比較はすべきでないだろうが、そこで二上山で見ることのできたキノコのいくつかを挙げてみたい。



←アンズタケ(アンズタケ科アンズタケ属) 初田川公園の平地にたくさん発生。アンズの香りがする。



ソライロタケ(イッポンシメジ科イッポンシメジ属) →人の手の指くらいの大きさだが、全身鮮やかなブルー。雌岳をめぐる遊歩道の崖地に出現。澤木さんに教えてもらった。珍しいキノコとのこと。

タマゴタケ(テングタケ科テングタケ属) →

今年5月頃だったか写真家の早津さんから、「タマゴタケが出たら一報を」と頼まれ、過去にタマゴタケが出た場所などを歩き、また二上山に登ってくる何人かの人に同様のお願いをしていた。



大阪側から登ってくる女性たちから「今日出ていた」と聞いて、確かめに行き、翌朝早津さんと駆けつけたが、すでに傘状に開いており、虫が食っていて写真にならなかった。

上の3つの写真は7月18日健生会友の会山歩きクラブの初級例会「二上山」に参加した折、登山道の傍らにこの3つが固まってでていたもの。まるで一つの被写体を時間差で写したように見える。この時もすぐ電話したが、早津さんは山上ヶ岳に泊りがけで出かけており、単独で翌早朝行ってみたが、すでに3つ揃って傘状になっていて、いずれも何者かの食害を受けていた。

下の写真 左キイボカサタケ 中アカヤマドリ(幼菌) 右オニタケ(幼菌)毒



二つのコマツナギ

今、二上山で2「種」のコマツナギが咲いている。ひとつは在来種で登山口の田畑の畦などで花を咲かせている。もう一つは写真のように旺盛な勢いで新開の道路わきなどで咲き誇っている。どちらもピンクの花で、山に花が途切れがちなこの時期、野山を飾っていて可愛い。

ただ、写真のコマツナギはおそらく外来種で道路工事後、緑を失った斜面などの緑化促進を期して人工的に植えられたものと思われる。そしてその期待に応じてコマツナギは斜面を覆うように咲き誇っているのだが、その勢いはやがて在来種のコマツナギの存在そのものを脅かしはしないのだろうか。多分中国原産の「トウコマツナギ」と推測される花を見つめながら、複雑な思いにとらわれていた。私の杞憂で終わればいいのだが。



趣の違う三つの山を歩く(10人の個人山行)

7月下旬、個人山行で群馬県、長野県の3つの山を歩いた。ゲリラ豪雨に見舞われ、予定変更を余儀なくされたが、登った山はそれぞれに個性的な特徴をもっており、十分に楽しむできた。長駆数百キロを運転して下さった方々、3日間山歩きを共にしてくれた仲間たちに感謝しつつ、その山行を紹介したい。

1. 荒船山(あらふねやま 1422.7m 200名山)



長野県佐久地方と群馬県西上州とにまたがる山域には、奇岩怪石の岩峰から成る山が多い。荒船山は妙義山と共にその代表格の雄山。左の写真(地元観光資料から)のように、まるで「荒海を蹴立てて進む艦船」の姿だ。山を遠望しただけで山名の由来が理解できた。翌日、宿泊した下仁田温泉のご主人は「ああ、軍艦山ですね」と言っていた。

このような地形は長期にわたる浸食によって造られたもので、メサ(スペイン語・卓上台地)と呼ばれ、固く平たい岩盤の下に柔らかい地層がある場合、浸食によって固い岩盤の部分が急崖に取り囲まれた台地として残されたもの。日本では他に香川県の屋島、大分県の万年山(は

ねやま)等があり、数年前に登った万年山ではメサが二段になっていて、それをミヤマキリシマの群落飾っていた。

世界的秘境となっている南米ギアナ高地のテーブルマウンテンも地形学的にはメサであり、こちらは16億年以上というとてつもない時間の浸食によって出来たそうだ。(恵谷治著「ギアナ高地に行く」)

さて、この荒船山に登ったのは7月20日。大和高田の土庫(どんご)病院前を朝5時に発ち、高速道路を乗り継いで、佐久南ICからコスモス街道と称されるR254を東進、登山口の荒船不動駐車場に車を入れた時は、すでに午後になっていた。

よく整備された道を登り、頂上の経塚山を踏んで、台地上の平たい道を北端の艦(とも)岩まで歩いた。笹原の上に喬木の茂る樹林帯の道で、不思議なことに小川まで **地元のひととハナビラタケ** が流れている。「ギアナ高地みたい」とT子さん。

樹林帯から艦岩展望台に飛び出した一行が一斉に叫んだ。「すごい!」。200mの断崖絶壁の上に立っているのだ。

快晴なら素晴らしい景観だろうと天候を恨みつつも、足をすくませるような高度感と涼風の中で、しばしの休憩を楽しんだ。

